

近畿地方の鍛刀工業

(刀劔の地理的研究第二稿)

小川 琢 治

本編は鍛刀工業地を歴史的發達の順序を逐ふてその地文及び人文的要因を考察する積であるから、地理學上の論文としては刀劔そのものゝ記載に偏すると同時に刀劔家にはまた語つて詳かならぬものとされるかも知れぬ。然れども最初に標榜した如く日本の聚落發達を研究して居住地理學の基礎を作らんとするには平安朝以前の地方工業として鍛刀工業は最も面白い問題であることを高調するのが本篇の趣旨であつた。研究の結果は我々の豫想外に出で陸奥の黄金發見よりも砂鐵採取の方が遙かに古くして、尙ほ大陸移住民が奥羽開發の先驅を成したと推定し得るに至つたのであるから、不十分な記述や脱線した考説に對して讀者の寛容を乞ふ外はな

い。本第二稿からは舞草から分れた鍛刀工業地中の最も古い近畿地方から順次考察する積りである。大和物の古いものには飛鳥奈良兩京に於て造られた第八世紀の刀劔があるべく、若し正倉院の御物の磨滅銘が完全に讀めたならば、その確實なものが知れる譯である。我々は昨秋纔かにその痕跡を發見したのみで、未だ之を精讀する機會を獲なんだ。然れども本篇第一稿及び「古刀劔の研究」(第一稿、「史林」二月號)に於て述べた如く、此の痕跡と庖丁物その他の古刀から略ぼ同年代に屬するものが民間に散在する事實を認めめた。今此處では御物を精細に研究する機會を得るまでに、姑く準備作業として自分の寓

目し得た狭き範圍内の研究結果のみを述べる。

大和物の原祖を小鳥丸の作者宇陀郡の天國（大寶頃）、門弟天座（同じ頃）、友光（文殊鍛冶元祖、和銅頃）とするのが従來鍛冶系圖の通説のやうである。その作品もまた天國在銘物が世間に往々傳はつて押形集に見えてゐる。然れども此の如き古作の現存に對して懷疑的なる今日までの鑑識家が認めて眞物と爲し得るものはいらしく、我々が今ま天平時代の古物の必しも世間に絶無ならざるを主張するに當つても、その作品を云爲するには尙ほ大に躊躇せざるを得ぬのである。従つて我々の茲に考定せんとする所は銘文から推究し得る天國以下諸刀工の傳說的系圖年代の問題に限られて、現存作物の有無眞偽を度外に措く外はあるまい。

天國の居た場處は系圖類何れも大和國宇多とし現存する古刀隱銘には通例和州住天國作又は磨上之と切つてゐるが、自分所藏の短劔に

大和國宇多住安倍忌寸天國磨上之

俘囚臣天國奉獻之（家書）

といふ銘文を認め、年月銘は「大寶元年辛丑（以下不明）」と讀める。他にも古刀銘に屢發見されるもので、「大寶二年壬寅五月朔日」「大寶三年癸卯六月廿六日」等の銘文も讀めた場合がある。故に天國に關する傳説は銘文研究によつて何等疑はしい所がないことが明かとなつた。従つて又飛鳥時代に奥州舞草より少しく後れて大和にも名工が出たことも確かとなつた。

而して此の刀工の姓が安倍忌寸で舞草鍛冶安倍忌寸安房等と同姓の俘囚であることは注意に値し、友光が移住する以前に天國が早く飛鳥京に近い宇多郡に來て鍛刀を始めたのでないかと想はれる。未だ精讀の暇がないので確言し難いが、この名も大寶の年號と共に和製銅佛の背面に讀めるらしいから、恐らくは鐵も銅その他の金屬の冶金加工が分業せぬ時代に屬するらしい。

和銅三年奈良京に遷都のあつた後に出了た刀鍛冶では盛國といふものが屢銘文に現はれる。此

の刀工は系圖には大和の部に見えずして、京物大宮鍛冶國盛一派の元祖とせられ、元明御宇和銅大宮彌五郎盛國といふものである。銘文に

和州三條大宮住藤原朝臣盛國磨上之

倅因臣盛國奉獻之(篆書)

と讀めるらしく、和銅四年辛亥八月朔日、五年壬子六月五日、同七月十五日、六年癸丑四月五日等の造銘もある。故に恐らくは奈良京遷都の時までは飛鳥京にゐた刀工で、授刀舍人寮が置かれ、蝦夷征伐が行はれた頃から刀劔の需要が盛んとなつた頃に名を擧げたものと想はれる。

此の三條大宮の地名は無論奈良京の坊中に屬するもので、多分宮廷の御用を勤めたであらうから、正倉院御物中の切先の兩刃になつた御劔の忠の一面に幽かに和銅の文字が讀めるらしいのから推測すれば、その裏面に此の刀工か又は同時の他の刀工の名かが發見されるかも知れぬ。

盛國といふ鍛冶は慶長三年の寫本古今銘盡(竹屋重次)には「備前國住、異說奥州住平城天皇御宇」と注し、板本寛永銘盡頭字寄分の部に

「京和同(銅)の頃彌五郎」と注し、本朝鍛冶考には京大宮鍛冶系圖に「元明御宇和銅、大宮彌五郎、千葉重代此作の太刀ありと云」と注し、その末孫が永延の國盛となつてゐる。今我々の讀んだ隱銘から推究すれば盛國の三條大宮住たる

こと、和銅年間とするのとは正しいが、和銅年間の三條大宮は寧樂京即ち奈良のことで、之を平安京の三條大宮と考定した從來の鍛冶系圖は全く誤つてゐる。然れども竹屋銘盡に異說として奥州住を擧げたのは一考の價値あるもので、同時に同地に友光が或は來てゐたかも知れぬから、盛國も亦た舞草鍛冶であり得るのみならず、平泉鍛冶が藤原姓を名乗るのから考ふれば早く倅因が藤原姓を冒してゐたと考へ得られる。

盛國と關聯して考へられるのは三條宗近であつて、此の永延年間の刀工の隱銘は屢忠に讀めると同時に、その宗近と盛國とが藤原朝臣の下に重つてゐるのが著しい。此の如き例は他の銘文で祖先父子の關係あるものに見る所で、宗近

の三條といふのは盛國の末孫で三條を氏としたものかと想はれ、又た宗近が永延頃に平安京に移住したもので、京大宮鍛冶の國盛と或は同時に移住したのかとも想はれる。

天國の弟子とされた天座、友光等も舞草系なることは前稿と茲に述べたので明かで、又た永延頃とされた清新大夫安則が月山鍛冶清原忌寸安則の後で、同名なるを區別する爲めに自から新大夫と名乗つたのも殆んど疑を容れぬ。安則の銘に伴ひ石徹丸といふ銘が必ずあるのが唯一本の石徹丸作者として傳つたらしい。

此の他の平安朝大和刀工で今まで我々の隠銘で發見したものは寥々として、唯一人一條天皇長徳寛弘間に奈良古市に住んだ行平のみがある。是は紀行平と稱し、豊後紀新大夫行平はその末流で、古行平と區別する爲めに大和安則の場合と同じく紀新大夫と名乗つたことは豊後行平の切つた銘に大和國紀行平といふ祖先銘があるので明かである。

此の如く未だ奈良平安兩朝の大和鍛冶に關す

る隠銘研究は十分でないから奥羽から、傳來して此處で如何に變化し如何に進歩したかを述べ能はぬのは遺憾である。

故今村長賀翁は大和物の古作の稀なるを説かれて千手院元祖で後鳥羽院御番鍛冶となり美濃千手院の元祖ともなつたといふ重弘の作品として確かなものを見ぬといはれた。我々は作の優否を知らぬが重弘の他の番鍛冶との合作銘あるものを隠銘から發見し、

大和國千手院住人藤原朝臣重弘

と刻人だのがその長銘たるを知つた。然れども他の鍛冶と合作なるが爲めにその作風の特長を明確に知ることが困難である。

重弘の後に出了た義弘は前に史林誌上で述べた如く、沸荒く亂れの華美なもので江と偽銘を重刻したらしいものを認める。

大和鍛冶に關して最も注意すべきはその中央政府の所在地に起つたに關らず、名工として聞えたものが少いことである。六國史に據れば近

江には鐵穴が處々に開かれたので原料の供給は絶無とはいへぬ様であるが豊富ではない。然れども此の如く平安朝に不振にして却つて元暦以下追々當麻尻懸手搔等の詣派刀工の輩出を見たのは主として戦争が久しく近傍に起らず、保元平治以後平安京が戦塵に蔽はるゝに至つて始めて需要が激増し、南都僧兵等にも供給するので大に旺盛となり、南北朝以後まで引續いて鍛刀工業の繁榮が續いたものらしい。之と同一の關係は平安京の鍛冶にも認められて、宗近國盛兩派の刀工の数が少いのも著しい。

此の如く鐵鑛原料の乏しい地文的關係は近畿

地方から遠く離れた奥羽中國等の原料産地に於て刀劔を作つて、原料よりも製品として中央に輸送するのが便利で、従つて鐵鑛産地に鍛刀工業が榮えたものと想はれる。

之を要するに他の工藝が中央政府の所在地たる近畿に於て進歩したのに反して、鍛刀工業のみが原料産地に於て永く榮えて、保元平治頃から近畿が屢戦鬪の巷となるに及んで却つて多數の刀工輩出を見たのは兵器製造業の他の工業と異つた特色とせねばなるまい。

尙ほ京及び近畿諸國の鍛刀工業に關しては更に續いて述べる。(乙丑四月十五日)

小佛古生層の時代如何

江 原 眞 伍

本邦の地質圖を一瞥すれば何人も關東山系が南西日本外帯の一斷片にして現在の位置に轉位せるものたるを想像するなるべし。

南西日本外帯の地質構造は最北に結晶片岩ありて其外側に秩父古生層中生層第三紀層の順に排列するに對して關東山系は最北に結晶片岩あ